

コミュニケーションにおける意図について

——Grice の非自然的意味 (non-natural meaning) に基づく考察——

中 島 信 夫

はじめに

Grice は, “Meaning” (1957) という論考で, 「話し手が発話においてあることを意味する (mean)」とはどういうことかを考察した。そして, その考察をめぐっては, 今に至るまで膨大な数の論文が書かれ論争が行われてきた。本稿では, そうした論争を参考にしながら, まず, Grice のいう「意味する (mean)」という関係がより基本的な「意図 (intention)」という概念によってどのように規定されているか整理してみる。そして, Grice の考え方を引き継ぐ Sperber and Wilson (1995) によって, 「意味する」という関係が語用論においてどのように位置づけられているかを見てみる。そのあと, コミュニケーションの具体例を見ながら両者の考え方の妥当性を検証し, そしてそれが実際の言語使用を分析する上でどういう重要性があるか考えてみる。

1. 発話の意図について

Grice (1957) は, 「 x が y を意味する (x means y)」という関係は概略2つの種類に分けられとする。1つは次の例のようなもので, 自然的ないし必然的因果関係を表す。Grice は, この関係を「自然的意味 (natural meaning)」と呼ぶ。

(1) a. Those spots mean (meant) measles.

b. The wet road means that it has rained.

もう一つは, 次のような例で, 慣習的ないし規約的關係を表すものである。

(2) a. Those three rings on the bell (of the bus) mean that the bus is full.

b. That remark, ‘Smith couldn’t get on without his trouble and strife [=wife],’ meant that Smith found his wife indispensable.

こちらの関係を Grice は「非自然的意味 (non-natural meaning)」と呼ぶ。特に (2b) のような場合, 行為者

(agent) を入れた3項関係としても現れる。

(3) A means (meant) y by x . (or A means (meant) by x that...)

例えば, 次のように話し手が自身の発話の真意を説明するような場合がそうである (通例 ‘by x ’ の部分は省略される)。

(4) Smith couldn’t get on without his trouble and strife.
I mean, he found his wife indispensable.

Grice は, この「行為者が x でもって y を意味する」という3項関係を意図的行為として捉え, 「意図」をより基本的概念として定義しようとした。それは, 例えば, Y氏が(5)のように, X氏の奥さんと変になれなれしくしている写真 (a photograph of Mr. Y displaying undue familiarity) をうっかりX氏の部屋に置き忘れて気づかなかった場合, X氏がその写真を見て奥さんとの関係に不審を抱いたとしても, (6)のように「その写真で……を意味した」とは言えないからである¹⁾。

(5) I left a photograph in Mr. X’s room by accident: and I was not unaware of this.

(6) I meant by the photograph that Mr. Y is unduly familiar with Mr. X’s wife.

それでは, 次のように「意味する」という関係を「意図する (intend)」という関係を用いて定義すれば良いかという点, まだ十分ではない。

(7) “The utterer meant_{NN} something by x ” is true if he intended x to induce a belief in some audience.

(mean_{NN} は「非自然的に意味する」という関係である)

次の(8)のように意図的にハンカチを置いた場合でも, まだ(9)のように「(非自然的に) 意味した」とは言えないからである²⁾。

(8) I left B’s handkerchief near the scene of a murder in order to induce the detective to believe that B was the murderer.

(9) The utterer meant_{NN} by B’s handkerchief that B was the murderer.

つまり、相手がその意図に気付いていないと「意味した」とは言えないのである。

そこで Grice (1989: 219) は、次のように「意図する行為の意図に気付かせることも意図する行為」というような自己言及的な定義を考えた。

- (10) A meant_{NN} something by x iff A uttered x with the intention of inducing a belief by means of the recognition of this intention.

(「Aはある信念を抱かせようという意図と共に、しかも[受け手に]その意図を認識させることによってその信念を抱かせようという意図と共に、xを発話した」清塚訳)

この定義は、this intention を次のようにその指示する対象となる意図と置き換えることができる。

- (11) A uttered x with the intention of inducing a belief by means of the recognition of the intention of inducing a belief by means of the recognition of this intention.

このような置き換えはいくらでも続けることができ、指示対象となる意図を段々と深く埋んで行くことが可能であり複雑である。

それで、Grice (1989: 92) は、さらに次のような自己言及を含まない定義を考えた³⁾。

- (12) “U meant something by uttering x” is true iff, for some audience A, U uttered x intending:
 [1] A to produce a particular response r
 [2] A to think (recognize) that U intends [1]
 [3] A to fulfill [1] on the basis of his fulfillment of [2].

この定義では、「意味する」という関係は3つの意図によって定義されている。まず、[1] (xにより) 相手にある反応を生じさせようとする意図、[2] 相手に意図[1]を気付かせようとする意図、[3] その[2]の意図が成就するという事で[1]の意図を成就させようとする意図、の3つである。Sperber and Wilson (1995: 29) は、この3つのうち[1]の意図を「情報(伝達)意図(informative intention)」, [2]の意図を「コミュニケーション意図(communicative intention)」と呼んでいる。

定義は、3つの変項 U, r, x (‘U intended r by x.’と略記できる)でもってなされているが、定義される側の3項関係 ‘U meant y by x.’のyは‘something’となっており、明示されていない。この‘something’は、定義側の「特定の反応(a particular r)」に対応していると考えられる⁴⁾。そこで、この反応rとはどういうも

のかを次の2つの代表的な発話について考えてみたい。

- (13) a. Sarah to Harry: Joan doesn’t like John.

b. Sarah to Harry: Come with me, please.

(13a)における意味の3項関係は、定義によると次のようになると考えられる。

- (14) [1] Sarah intends Harry to have a belief that Joan doesn’t like John.

[2] Sarah intends Harry to recognize that she intends [1].

[3] Sarah intends Harry to fulfill [1] on the basis of his fulfillment of [2].

つまり、この場合、反応rは、‘a belief that Joan doesn’t like John’という信念と考えられる。(13b)の場合は、意味関係は次のようになると考えられる。

- (15) [1] Sarah intends Harry to intend that he should come with her.

[2] Sarah intends Harry to recognize that she intends [1].

[3] Sarah intends Harry to fulfill [1] on the basis of his fulfillment of [2].

この場合、反応rは、‘that he should come with her’(来るべきだ)というSarahの欲求と考えられる。

定義(12)でもう一つ問題となるのは、意図[3]がどういうものでなぜ必要かということである。Griceは、次の2つの[2]の意図を持つ例をあげ、その2つの違いを説明するためには意図[3]が必要であると言っている⁵⁾。

- (16) a. I show Mr. X a photograph of Mr. Y displaying undue familiarity to Mrs. X.

b. I draw a picture of Mr. Y behaving in this manner and show it to Mr. X.

つまり、どちらも「Y氏と妻との関係が怪しい」という信念をX氏が持つように意図し、その意図にX氏が気づくよう意図するものであるが、(16a)では、写真と写真が示す事態との自然的関係があるので、[1]の意図を気づかせようとする[2]の意図がなくともX氏はY氏と妻についての信念を持つことができる。これに対し、(16b)では、意図[3]が決定的な役割を持っており、X氏はY氏と妻についての信念を持たせようとしているという意図にX氏が気づかず、単にいたずら書きか何かをしていると思ってしまうばコミュニケーションは成立せず、「非自然的に意味する」という関係は成立しない。このように、Griceは[3]の意図を自然的意味と非自然的意味とをはっきり区別するために設定している。

言語コミュニケーションにおいて、通常、定義の3つの意図は決定的な役割を果たしている。ただ、Sperber and Wilson (1995: 28-29) が指摘しているように、意図の成就という点に関しては、この3つの意図のうち [2] のコミュニケーション意図が重要で、[1] の情報意図と意図 [3] が成就していなくても [2] が成就しておればコミュニケーションは成立していると思ふことができる。例えば、(13a) の例では、Joan が John を嫌っていることを Harry が信じなくても Sarah がそのことを信じさせようとしているということに Harry が気づけばコミュニケーションは成立する。(13b) でも、Harry が Sarah と一緒に行かなくても、一緒に来て欲しいという Sarah の欲求に Harry が気づけばコミュニケーションは成立する。

Grice の「意図」による「非自然的に意味する」という関係の定義はかなり巧妙なものであるが、この定義がコミュニケーションを規定する上で十分なものであるかどうかについては様々な意見がある。特に、Strawson (1964: 28-30) は、例をあげて Grice の定義は [2] の明示性 (overtiness) に関して不十分であることを指摘している⁶⁾。次は、Sperber and Wilson (1995: 30) が作った Strawson のものと同趣旨のより具体的な例である。

- (17) Suppose, for instance, that Mary wants Peter to mend her broken hair-drier, but does not want to ask him openly. What she does is begin to take her hair-drier to pieces and leave the pieces lying around as if she were in the process of mending it. She does not expect Peter to be taken in by this staging: in fact, if he really believed that she was in the process of mending her hair-drier herself, he would probably not interfere. She does expect him to be clever enough to work out that this is a staging intended to inform him of the fact that she needs some help with her hair-drier. However, she does not expect him to be clever enough to work out that she expected him to reason along just these lines. Since she is not really asking if Peter fails to help, it will not really count as a refusal either.

ここで、Mary は故障したドライヤーの修理を途中までにして Peter に直してもらおうとしているので、[1] の意図は成立している。そして、Mary は修理中であることをわざとらしくすることによって、直してもらいたいという意図を Peter に気付いてもらおうと

しているので、[2] の意図も成立している。さらに、Peter は修理中であることを見ただけでは修理を手伝おうとしないので、[2] の意図に気付かなければ修理を手伝おうとしない。従って、[3] の意図も成立している。

このような場合、3つの意図が成立していても「(非自然的に) 意味する」という行為は成立していない、つまり、通常の意味でのコミュニケーション行為は行われていないというのである。それは、通常の言語コミュニケーション行為のように、[2] の意図が明示的 (overt) に示されていないからである。この [2] の意図の明示という問題については、次節で Sperber and Wilson (1995) の考え方を検討する中で検討したい。

2. 関連性理論 (relevance theory) における コミュニケーションの考え方

Sperber and Wilson (1995) は、前節でみた Grice の非自然的意味についての考え方を発展させ、コミュニケーションという「現象」を Grice の非自然的意味によって規定されるものよりもっと広範囲なものとして捉えようとしている。

まず、話し手と聞き手が同時存在するコミュニケーションの場所を、相互認知環境 (mutual cognitive environment) と呼び、そこでは両者による相互の知覚、認知が可能となっている⁷⁾。例えば、そうした場に泣いている子供がいたとすると、話し手と聞き手には、泣いている子供の姿が見え、泣き声が聞こえ、さらに、子どもの姿が見えている両者の姿がお互いに見える。また、それぞれ子どもが泣いていることを信じ、そのように相手が信じていると相互に信じることができる。

コミュニケーションは、このような認知環境において知覚ないし認知される、ある「もの」ないし「こと」を作り出す意図明示行為 (ostension) によって行われる⁸⁾。例えば、次のような行為が意図明示の行為と言える。

- (18) 畑山警務一課長は、警務部長室のドアをノックして、そのカーペット敷きの部屋に入った

警務部長の谷口優哉警視長は、携帯電話を耳に当てて電話中だった。畑山が入ってきたのを見て、片手を上げた。ちょっと待て、という意味のようだ。佐々木譲「警官の条件」

ここで、谷口警視長の行った片手を上げるという行為は単なる動作ではなく意図明示の行為で、畑山はその

ように解釈し、その意図内容を「待つ」という意味に解釈している。(17)の例における Mary のドライヤーを修理中らしく見せる行為も同じく意図は明示されていると見ることができる。しかし、Mary と Peter が同時存在する認知環境の中では行われていないので、その行為は相互に確認できない。そのことが Mary の行為をコミュニケーション行為と呼ぶことをためらわせる理由であり、従って、ここでいう意図の明示された意図明示行為とは見なすことはできないのである。

次の例では、Peter は体を後ろにわざとらしくそらすという意図的行為を行っている⁹⁾。

(19) Mary and Peter are sitting on a park bench. He leans back, which is more rigid than if he were merely trying to find a more comfortable position. As a result of this, she can see her acquaintance William, a dreadful bore, coming towards them.

この Peter の行為が Mary に William が来るのを見させようという意図のもとに行われた場合、意図明示行為と見なすことができるであろうか。Grice の (12) の定義によれば、この行為は非自然的意味とはいえない。なぜなら、Mary が Peter の意図に気づかなくても、つまり、(12) の [3] の意図が成就されなくとも、William が来るのに気づかせるという意図は達成させることができるからである。しかし、Sperber and Wilson (1995) の意図明示行為の規定の中には、(12) の [3] のような意図は含まれていないので、Peter の体を後ろにそらす行為は、彼らのいう意図明示行為になっている。同様に、(12) の [3] の意図が成就しなくても [1] の意図が成就し得る例である (16a) の自然的意味を持つ写真を示す (show) 行為も、意図明示行為と見なすことができる。Wharton (2009) は、表情 (facial expression)、震え (shiver)、笑い (smile)、間投詞 (interjection) など自然的意味を持つ動作を「意図的に示す (show)」用法について考察している。

情報を伝える場合、情報意図に気付いてもらうということが重要である。(19)の例では、「William が来る」という意図した情報はその意図に気付いてもらえなくても伝わるであろうが、相手の Mary が Peter の意図に気付けば、2 人の間で情報を共有することができ、共同して問題に対処できる。そうした情報意図が十分に満たされている状況であれば、(12) の [3] の意図は ‘mean’ という動詞の使用法を明らかにするには必要であっても我々が通常行っているコミュニケーションという行為を解明し記述するにはあまり重要ではない (Wharton (2009: 27-28, Sperber and Wilson

(1995: 54)))。

3. 具体例での考察

コミュニケーションにおける意図を分析、考察する際、哲学者達が提示する例は哲学的問題を明らかにするために作られた非常に作為的なものである。そうした例は可能性としては考えられないことはないが、我々の通常のコミュニケーションにおける意図行為とはかけ離れた気がする。そこで、この節では、前節での考察を踏まえ、より現実に近い小説 (佐々木譲の作品) での情報伝達の例について考えてみる。

3.1 非意図的行為の例

まず、意図的行為でない場合で、表情の持つ自然的意味によって情報が伝わる次の例を見てみたい。場面は、ジャズ・バーである女性に出会った刑事の津久井が、一度店を出て、再びそのバーを訪れて飲んでいると、その女性も再びバーにやって来たところである。

(20) ドアが開いた。

津久井は顔をドアに向けた。もしかすると、何かを期待していたのかもしれない。だからドアの開く音に、意識を通過させることなく反応していた。期待していたものが、そこにあった。

安西奈津実だ。さっき見たときと同じ服装だった。奈津実が、驚いた顔を見せた。次の瞬間、彼女の顔に隠しようのないうれしさが走った。彼女もまた期待していたのだとわかった。津久井とこの店でもう一度会うことを。

「憂いなき街」

ここで、津久井は彼女の表情から「彼女が彼に会うことを期待している」という信念を持つが、そうした表情は彼女が意図したものではない。

笑い (smile) の場合、意図的なものと自発的なものとは神経経路 (neural pathway) が異なるという¹⁰⁾。作家がそういう知識を踏まえて書いているかどうか判らないが、2つの笑いが巧みに使い分けられている。次の (21) は、(20) と同様、自発的な笑いである。

(21) 部屋の隅から、若い石原がふしぎそうに訊いてきた。

「どうかしましたか」

「何が？」

「笑ったから」

自分はいま笑ったのか。だとしたらそれは苦笑だ。捜査員としての押しと引きの呼吸間隔が完

全に麻痺したことを、おれはいま意識したのだ。

「警官の条件」

これに対し、次は意図的な笑いで、お世辞を言われたときの愛想笑いである。

- (22) 「安西さんのステージは、その一回だけですか。それとも、こんどのカルテットはこのまま続くのかな」
 「四方田さんには、そのつもりはないでしょうね。緊急避難でわたしに声をかけてくれただけだと思う。私も、誰とでも、どこでも、共演するつもりはあったし」
 「新しい四方田カルテット、一回かぎりじゃ惜しい」
 「そんなんじゃありませんって」奈津実が白い歯を見せて言ったが、目は笑っていない。

「憂いなき街」

このような愛想笑いには明確な情報意図はないが、次の意図的な笑いは、情報意図とコミュニケーション意図を持っていると考えられる。

- (23) 堀田が言った。
 「例の名古屋の闇サイト殺人事件だ。被害者ひとりで、ふたりの死刑とは、珍しいな」
 和也も感想をもらした。
 「必ずしも例外的ってわけじゃないと思います。奈良の少女殺害事件の判決も被害者ひとりで死刑でしたし、被害者ふたりで3人死刑の判決もあった。氷山規準は、もうなくなったようなものですね」

堀田が和也に視線を戻して微笑した。

その調子で警部昇任試験を突破せよ、という意味だろう。 「警察の条件」

このような例の笑いは、(18)の手を上げる動作に似てかなり記号化しているように思われる。

表情の中でも「目」は、(22)の「目は笑っていない」という表現や次の例の示すように、もっぱら自然的意味を表すものとして扱われている。

- (24) (津久井がラウンジで待っているようにと言ったのに対し、「一緒に降りて行く」と奈津実が言った後の場面)
 エレベーターの前に出た。奈津実が昇降ボタンを押して、津久井に振り返った。
 「津久井さんの気が変わって、いなくなってしまうかもしれないでしょ」
 冗談めかした言葉だったが、目は真剣に見えた。そういう体験がないわけではないのだ、と

でも言っているような。それをほんとうに案じているのだ、と打ち明けているような。

「憂いなき街」

次は行為の実行をためらう、あるいは、実行しないということが、行為と同じ役割を情報伝達において果たしている例である。

- (25) (樋口刑事ともう1人のおとり捜査員を人質に取った犯人達を警察が追い詰めている場面)
 「樋口は生きているんだな」
 「ああ」
 「もうひとり」
 返事が一瞬だけ遅れた。
 「ああ」
 「殺したな」和也は冷たく言った。「おれたちは、5人目を撃つぞ」
 無言だ。殺したことを認めたのだ。

「警官の条件」

この例での「ためらい」とか「無言」は意図的なものではない。

3.2 意図的行為の例

一般に、言語を用いた情報伝達は、Grice のいう非自然的意味で [1], [2], [3] の意図を持つが、特殊な状況では意図 [3] の当てはまらない場合もある。次は、銃を持った複数の犯人を警察が2つの班で追い詰めて行き、その内の一方の班がフラッシュバン (flash bang) を使おうとしたところである。

- (26) 小笠原は安城係長に言った。
 「やつら、動きました」
 「聞こえた。いまだ。やります」
 「了解」
 小笠原は、飯塚に顔を向けて言った。
 「フラッシュバン、投入」
 「はい」
 山本が、手斧 (ちような) でドアについているガラスを割った。ガシャリと大きな音がした。割れた穴から、飯塚が黒い円筒状のものを放り込んだ。缶コーヒーほどのサイズの手榴弾だ。
 小笠原は大声で言った。五課の捜査員達にも聞こえるように。
「目をつぶれ。耳をふさげ」
 ほんのひと呼吸あって、爆発音が響いた。どおんという、激しい衝撃波。つぶった目の網膜にも、いまこのあたりに強烈な閃光が走ったのがわかった。 「警察の条件」

この場合、相互認知環境は、通常と異なり、聴覚だけの知覚が可能で視覚による知覚は遮断されている。結果として、小笠原のコミュニケーション意図が伝わりにくくなっている。仮にその意図が伝わらなくとも声さえ聞こえれば、小笠原の情報意図は成就される。この点で、(26)の例は(19)の例と似ている。コミュニケーション意図が伝われば相互の協力関係は円滑に行われるが、伝わらなくとも情報意図は成就される。コミュニケーション意図が伝わらない場合、小笠原の「目をつぶれ。耳をふさげ」という発話は、別の班のものにとって「立ち聞き」と変わらなくなる。単なる立ち聞きは、Griceの非自然的意味でも Sperber and Wilson (1995: 55-54) の情報意図とコミュニケーション意図からなる ‘Ostensive-inferential communication’ の意味でもコミュニケーションではなくなる。

次は、言語を用いた情報伝達ではないが、Griceの非自然的意味の3つの意図を持ち、従って、Sperber and Wilson (1995) のいうコミュニケーションの実例となる例である。津久井は年下の同僚滝本と捜査に当たっているが、滝本がある女性のことで色々と詮索するような質問をしてくるのでうんざりしているところに電話があり一時中断する。そしてその電話が終わった後の場面である。

(27) 携帯電話をたたむと、滝本が運転しながら横目で津久井を見てきた。

津久井は言った。

「適当なコンビニに寄ってくれ。昼飯が必要だ。サンドイッチか握りメシを買う」

このホテルから札幌パークノース・ホテルまで、たぶん十分ぐらいの時間はかかる。それまで滝本から質問されなくなかった。やつに昼飯を押しつけてやれば、質問はあとにしてくれるだろう。

サンドイッチを買ってやった意味に気づいたのだらう。滝本はサンドイッチを食べ終えたあとも、津久井には質問することなく運転し、十分弱で札幌パークノース・ホテルに車をつけた。

「憂いなき街」

この場合、「弁当を買ってやる」という意図的行為が Grice (1989: 216) がいう広い意味での「発話」になっており、非自然的意味の [3] の意図は不可欠である。これがないと [2] の意図に気づかなかったときには、弁当を食べている間だけ黙っているだけで、目的地に着くまで黙っているということはないであろう。

この例では、当該の「発話」における相互認知環境

は、弁当を買う前から来るまで目的地に着くまでというかなり広範囲にわたる時空間になっている。これは、「発話—意図の了解—意図の成就」というプロセスがいわば「瞬時」に行われる通常の言語コミュニケーションと比較して、「弁当を買ってやり、それを食べて、意図に気付いて、質問をひかえる」という一連のプロセスがどうしても時空的な広がりを持ってしまうからである。

次は、意図的行為の「発話」が、1つの行為ではなく複数の一連の行為から成り立っていると考えられる例である。同じく津久井と滝本のチームが捜査に当たっている場面であるが、滝本が、先に三杉留美殺害の参考人大概に職務質問をしていると、そこに津久井が割り込んできたところである。

(28) 津久井は強引にそのやりとりを割り込んだ。「三杉留美さんは、四方田さんのいまの彼女のことを、知っていましたか?」

大概は大きく頭を振った。

「だから、おれは三杉留美って女を知らなかったし、いま四方田がどんな女とつきあっているのかも知らないんだよ」

「もし昨日その場にいまの彼女がいたら、どうなっていたと思います?」

滝本が津久井の横顔を見つめてくる。それは誘導だろう、とでも言っているのか。

大概が答えた。

「それこそ、純はあたしのものよ、とか叫んでつかみあいじゃないの」大概は、パンと軽く手を打った。「そうか、あの店に四方田の新しい彼女がいるんだと思って乗り込んできたのか。そういうことだったのか」

その読みを聞きたかった。それでいい。津久井は、あえてその読みを口にした。

「だけどもうそういう女性はいなかった。いたのは、共演者だけ」

「そうだな」

津久井は滝本に顔を向けてうなずいた。十分だ。

大概に礼を言って、喫茶室のテラス席から送り出した。

滝本が手帳に目を落として、ボールペンで何か書き入れた。メモのし忘れでもあったのかもしれない。最後のおれの質問が、聞き込みのセオリーを忘れたミスだと思ったろうか。それとも意図的なものだと気づいたろうか。大概の言

葉をじつは滝本に聞かせたかったのだとまでは、思い至らないだろうが。「憂いなき街」この例では、下線の3つの発話が全体として1つの意図的行為としての「発話」を形成していると考えられ、結果として、相互認知環境は広範囲にわたることになる。また、情報意図（の内容）には次の2つがあると考えられる。

(29) a. 三杉留美の思っていた女性はそこにいなかった。

b. 大概は「三杉留美の思っていた女性はそこにいなかった」と思っている。

この内 (29a) についての信念については、津久井のコミュニケーション意図に気づかなくても滝本は持つことができる。(29b) については、そもそも津久井は情報意図だけでコミュニケーション意図は持っていないと考えられる。

この節で見た意図明示行為の意図明示は、(18)の「片手を上げる」動作や(23)の「微笑」のように「あからさま」に行われてはいない。近くにいる者に対しては少し大きすぎる大声、少し場違いな弁当を買い与えるという行為、誘導とも思える質問などから間接的に行為者の意図は推測されている。これは、いわゆる Grice (1989: 35) のいう「会話の含意 (conversational implicature)」の例に似ている。

(30) At a genteel tea party:

A: Mrs. X is an old bag.

(There is a moment of appalled silence)

B: The weather has been quite delightful this summer, hasn't it?

ここで、話し手Bは、Aの発言がこの場ではしてはいけないものであることをAに気づかせようと意図し、その意図を明示しようと意図しているのであるが、“That's a faux pas.”といった直接的明示ではなく、間接的に伝えようとしている。つまり、場違いな発言ではあるが、その場の会話の中に埋め込まれた発言によって間接的に示そうとしている。実際、Aは、Bのコミュニケーション意図を察知した場合でも、次のように何事もなかったかのように会話を続けることができる。

(31) A: Mrs. X is an old bag.

B: The weather has been quite delightful this summer, hasn't it?

A: Yes, it has, indeed.

この節で見た(26)、(27)、(28)の例でも、行為者のコミュニケーション意図は、一連の行動、行為の継起の中の「発話」に織り込まれている。

このような意図の折り込みは、動物の描き込まれた次のような隠し絵に類似している。この絵を見る人は、描かれた森を見るだけでなくその中にこっそりと描き込まれた動物を発見する。コミュニケーションにおいても、行為者が自分の意図を発話の中にこっそりと描き込み、相手がその意図を発話の中に発見するということが行われるのである。



安野光雅『もりのえほん』より¹¹⁾

コミュニケーション意図は、常に明示的にあからさまに示されているのではなく、ここで見たように、発話の中に織り込まれ、「みえみえ」ではあるが一種の偽装が行われている。このような意図の示しかたは、ポライトネス・ストラテジー (politeness strategy) の1つと考えられるが、そうした意図明示のあり方を解明することは、哲学的には興味がなくても言語学的には興味のある重要なことである。

4. 情報意図の特定

情報意図の意図内容、つまり、発話によって発話者が伝えようとしている情報について、Sperber and Wilson (1995: 54-60) は、それを特定の意味内容に限定するのはコミュニケーションの実態にそぐわないと言う。発話者の情報意図は、発話によって聞き手の認知環境 (cognitive environment) を変えよう (modify) とすることにあり、実際にどのように変わるかは発話者によっても部分的にしか予測できないという。このような考えに基づいて、Sperber and Wilson (1995: 58)

は情報意図を次のように規定する。

(32) *Informative intention*: to make manifest or more manifest to the audience as a set of assumptions I. ここで「想定 (assumption)」とは、想像することとか欲求することではなく、実際の世界についての概念的な表示 (conceptual representation) と規定されている。

このような情報意図の規定が、実際のコミュニケーションの実態を正しく捉えているかどうかを、具体的な例で確かめてみる。まず、次は、薬物使用という嫌疑で現職の刑事加賀谷をいったん逮捕したが、理由があって自主的に退職するという形にしようとしている場面である。

(33) 畑山が、斉藤に向き直って指示した。

「加賀谷が退職願を書く。用紙とペンを用意してやれ」

石原が立ち上がって、部屋を出て行った。

加賀谷はまた畑山に訊いた。

「退職願の日付はきょうですか？」

「先週末だ。土曜日」

それはつまり、加賀谷の今週の行動はすべて、私人として、一般民間人としておこなわれたものとして記録する、という意味だろう。

「警官の条件」

ここでは、実態に合わない日付を記入させようとしていることから推察して、畑山は、下線部の想定を明確に意識して発言していると考えられる。つまり、この場合、発話によって顕在化された想定には、「先週末の土曜日の日付にする」という言葉によって明示されたものに加えて下線部の意識された想定が含まれている。これに対し、次の例では、下線部の想定が発話者瀬波に明確に意識されているかどうかは微妙である。

(34) 係長の安城和也が部下の瀬波にあることを調べるよう頼み、その返事を受け取ったところ：

携帯電話が鳴った。瀬波からだった。

「保証人の山際誠司、わかりましたよ。データベースからじゃないんで、完全に正確かどうかは微妙ですけど」

同僚で詳しくそんな男にあたってみたということだろう。 「警官の条件」

次の例では、まず、ホテルマンの「2412室だ」と言う最初の発話は「四方田がその部屋に宿泊しているから会える」という想定を顕在化させ、その想定を津久井が確認して「今、会うことは可能か」と問うている。2番目の発話は、その問に対し「可能だ」という答え

になる想定を顕在化している。そして、これらの想定はホテルマンは明確に意識している。

(35) フロントの中年のホテルマンにまた警察手帳を示して、津久井は言った。

「四方田純というお客に会いたいのですが」

慇懃なホテルマンはモニターを見て言った。

「二十四階、二四一二のお部屋です」

「いますね？」

「少し前にルームサービスの朝食が運ばれたばかりです」

ぜいたくな泊まりかたをしている男だ。津久井は頭を下げてエレベーター・ホールへと向かった。 「憂いなき街」

しかし、2番目のホテルマンの発話によって顕在化された下線部の想定は、ホテルマンの意識するところではないであろう。

次の例は、発話者が意識していなくても、顕在化された想定には責任を取らなくてはならないことを示している。

(36) 「あのときに、一緒に確保しておくべきでした。」
言ってから、津久井はそれが長正寺の指揮のミスを指摘したことになると気づいた。すぐにつけ加えた。「もっとも、あのときはそこにいるのが栗橋かどうか確認できてませんでした」

長正寺は、気にする様子も感じさせない声で言った。

「実行犯の確保が、うちの最優先任務だ……」

「憂いなき街」

また、次の例では、発話が冗談めいていることから、下線部の推測内容は、発話者が意識しているかどうかというより、そもそも顕在化された想定の中には入らない可能性もある。

(37) 「テンションを上げるための服が必要。明後日は、パリッとしたテイストでいきます」それから奈津実は、大きく口を開けて笑った。「ちょっと張り込んでしまいました。レザーのパンツ。来月の引き落とし、綱渡りかな」

経済的には苦しいと言っているのかもしれない。彼女の業界事情に詳しくはないが、ホテルのラウンジでピアノを弾く仕事というのは、さほどいいギャラをもらえるものではないのだろう。 「憂いなき街」

つまり、単なる「想像」は「実際の世界」についての表示と規定される「想定」にはならない。

これらの例において、発話から得られる想定を整理

すると次のようになる。

(38) 言語表現による想定とそれから推論によって得られる想定：

- ・先週の土曜日に退職したことにすれば、問題の行動は私人がしたことになる。
- ・データベースではなく、同僚の記憶によるので、完全に正確とはいえない。
- ・四方田は2412室に宿泊しているから会うことができる。
- ・朝食を運んだから、今部屋にいる。
- ・贅沢な泊まりかたをしているから、部屋に朝食を運ばせた。
- ・一緒に確保しておくべきだと言うことは、長正寺のミスを指摘したことになる。

下線部が推論によって得られる想定で、残りの部分が言語表現によって明示されている想定であるが、両者の関係は因果関係など様々である。例で見たように、これらの想定の内、発話者がはっきり意識していないものもある。それゆえ、発話者が顕在化しようとしている想定の集合は輪郭のはっきり定まったものではない。

また、顕在化される想定の内、発話者が伝えたい主要な想定は、必ずしも言語表現によって明示された想定とは限らない。例えば、次の(39)の談話において、Bの発話 U_n が顕在化する想定は、少なくとも(40)の図のP, Q, Rの想定が考えられる。

(39) A: Do you want to go play some ball? U_{n-1}

B: It's the middle of the afternoon. I'm working. U_n

(40) ..., U_{n-1} , U_n , U_{n+1} , ...

↙ ↓ ↘

P Q R ……

P=It's the middle of the afternoon.

Q=I'm working.

R=I cannot play any ball.

この内Bが最も伝えたい想定は、言語表現によって明示されたP, Qではなく、それらから推論によって得られるRである。

このように発話者が最も伝えたい想定が言語表現によって明示されない場合があるので、発話者の伝えたい想定を聞き手が同定しがたい場合がしばしばある。次はそうした例である。

(41) 加賀谷は、畑山を見つめた。警務部長を通して警察庁長官の久保総括審議官に情報は伝わったのであろうか。

畑山は、加賀谷の正面の椅子に腰を下ろすと、

いまいましげに加賀谷を見つめてから言った。

「総監は、現職警部のこれ以上の不祥事発覚を望まない」

加賀谷は、畑山の言葉の意味を理解しようとつとめた。要点はどこだ？ 現職警部、という部分がキーワードか。いや、それとも、発覚を望まない、という部分がこの発言のキーか。

答えを見つけれられないまま黙っていると、畑山は言った。

「総監は、お前が依頼退職する意志があるなら許すとのことだ。今すぐ決めろ」

依頼退職。総監からの事実上の指示、ということになるのか。 「警官の条件」

こうした場合、一般には、「どういうこと（意味）ですか？」とか「（それは、つまり）……ということ（意味）ですか？」といった問いでもって発話者の意図した想定を確かめることができるが、確かめにくい場合、あるいは、確かめることができない場合が往々にしてある。一方、発話者の方でも、自分の意図した想定をはっきりさせるために、「（それは、つまり）……ということ（意味）です」といった言い方をすることがある¹²⁾。

また、次のような例がコミュニケーションをさらに複雑にする。

(42) 和也は用を終えて、洗面所に移動した。樋口も少し遅れただけで、洗面所に移ってきた。和也の隣りだ。

「警察病院のあと、本庁で事務的な用件を片づけてきたんだけど、食堂で五課の捜査員に会った」「誰？」

「ちょっと知っている男さ」 $=U_n$

名は聞くな、という意味のようだ。

「そいつが何だって？」

「加賀谷は、八王子の一件について、言ったそう。一人前にしておくべきだったって」

「殺された寺脇のことか」 「警官の条件」

これは、いわゆる Grice (1967) のいう「会話の含意 (conversational implicature)」の例で、Grice (1967) のあげる(30)やその他の例と同様、会話の公準を意図的に破り、下線部の発話者樋口は、わざと十分な情報を与えていない、そして、それによって、「名前は聞かないでくれ」といった含意を伝えようと意図している。これを次の図によって示すと、まず、発話 U_n は会話の公準「必要な情報を与えよ」にわざと違反することにより、ボールドUという発話として別の働き

を同時にする。

(43) X Y Z ……

↖ ↗

U

↑

..., U_{n-1}, U_n, U_{n+1}, ……

↙ ↘

P Q R ……

X=必要な情報は与えられない

Y=名前は聞かないでくれ

この発話 U は、「必要な情報は与えられない」という想定 X を持ち、さらに、推論によって「名前は聞かないでくれ」という想定 Y も持つ。そしてこの Y が発話者樋口が意図した情報意図の中心となる内容である。ここで重要なのは、発話ボード U による想定 X, Y 等は、発話 U_n による想定 P, Q 等とは別レベルの情報であるということである。つまり、(42) の例では、2つの異なったレベルのコミュニケーションが同時並行的に行われているのである。

5. まとめ

Grice は、「情報を伝えようとする意図」、「その伝えようとする意図を相手に気付かせようとする意図」、さらに「気づかせることで情報を伝える意図を達成しようとする意図」の三層の意図でもって、自然的意味と対比される非自然的意味を規定した。これに対し、Sperber and Wilson (1995) は、情報意図とコミュニケーション意図の2つに限定している。そして、自然的意味を意図的に用いる行為をも含めることによって、Grice の言語を中心とする非自然的意味を規準とした場合よりもより広範囲にわたる情報伝達行為をコミュニケーション行為として規定した。

Sperber and Wilson (1995: 55) は、言語コミュニケーションを「代表的例ではなく特殊例 (not a typical but a limiting case)」と捉えているが、実際の具体例を検討してみると、その感を深くする。非言語コミュニケーションを含めたより広い意味でのコミュニケーションの中に言語コミュニケーションも含めて考察することにより、言語コミュニケーション自体もより明らかになると考えられる。

また、Sperber and Wilson (1995: 54-60) では、発話の働きは、発話者と相手の両者の相互認知環境を改

変し一連の想定を顕在化させることとされている。その場合、直接顕在化される想定に加え、Grice が例にあげるような「会話の含意」を生み出す発話では、別レベルの情報意図が同時に存在すると考えられる。従って、我々が行っているコミュニケーションは、複数のレベルにわたる重層的な情報伝達行為と捉えるべきである。

注

- 1) Grice (1989: 218) を参照。
- 2) Grice (1989: 217) を参照。
- 3) この (12) 定義と、この定義を中心とした Grice の「話し手の意図」については、飯野 (2007) の第Ⅱ部で詳しく論じられている。
- 4) この点に関して、Grice (1989: 220) は、次のように述べている：
...to ask what A meant is to ask for a specification of the intended effect (though, of course, it may not always be possible to get a straight answer involving a “that” clause, for example, “a belief that...”).
- 5) Grice (1989: 218) を参照のこと。
- 6) 引用のページ数は Searle (1971) におけるもの。
- 7) Sperber and Wilson (1995: 39) において、「認知環境」は、まず、顕在的 (manifest) という関係が次のように定義され、
i. A fact is *manifest* to an individual at a give time if and only if he is capable at that time of representing it mentally and accepting its representation as true or probably true.
この関係をもとに次のように規定されている：
ii. A *cognitive environment* of an individual is a set of facts that are manifest to him.
- 8) Sperber and Wilson (1995: 48-50) を参照。ここでは、「意図明示行為」は次のように規定されている：
We will call such behaviour — behaviour which makes manifest an intention to make something manifest — *ostensive* behaviour or simply *ostension*.
- 9) (19) の例は Sperber and Wilson (1995: 48-49) の例に少し変更を加えたものである。
- 10) Wharton (2009: 33) を参照。
- 11) オリジナルはカラーで、虎2匹、牛、アヒル、リス、コウモリが描き込まれている。
- 12) 英語では、発話者の意図を問うときの表現には、‘What do you mean?’, ‘Do you mean...?’ がある。発話者自身の意図をはっきりさせるときの表現には ‘I mean...’ がある。中島 (1987) では英語の場合について、中島 (1994) では日本語の場合について、それぞれ発話者の情報意図の特定について論じた。

参考文献

- Clark, H. H. and C. R. Marshall (1981) “Definite Reference and Mutual Knowledge,” in D. K. Joshi, B. L. Webber and I. A. Sag eds. (1981) *Elements of Discourse Under-*

- standing*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 10-63.
- Grice, P. (1957) "Meaning," in Grice (1989), pp.213-223.
- _____ (1969) "Utterer's Meaning and Intentions," in Grice (1989), pp. 86-116.
- _____ (1975) "Logic and Conversation," in Grice (1989), pp. 4 22-40.
- _____ (1989) *Studies in the Way of Words*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (清塚邦彦訳 (1998)『論理と会話』勁草書房)
- 飯野勝巳 (2007)『言語行為と発話解釈』勁草書房
- 中島信夫 (1987)「話し手の意図していること (What Speaker Means)」『甲南大学紀要』文学編 61 英語学英米文学特集
- _____ (1994)「「どういう意味？」って、どういう意味？—「意味への問い」の状況意味論的考察—(Utterance Meaning and Situation Semantics)」『甲南大学紀要』文学編 88 英語学英米文学特集
- Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*, Oxford: Blackwell.
- Strawson, P. (1964) "Intention and Convention in Speech Acts," *Philosophical Review* 73, 439-60. Reprinted in J. Searle ed. (1971) *The Philosophy of Language*, Oxford: Oxford University Press, 23-38.
- Wharton, Tim (2009) *Pragmatics and Non-Verbal Communication*, Cambridge: Cambridge University Press.

資 料

- 安野光雅 (1977)『もりのえほん』福音館
- 佐々木譲 (2014)『警官の条件』新潮文庫
- _____ (2014)『憂いなき街』角川春樹事務所